猫蓑通信

第123号

令和六年
（2024年）
1月15日発行
（年４回発行）

一年間――猫蓑会会長　鈴木千恵子

新しい年を迎えました。この場で青木秀樹前会長への謝辞とこれからの決意を述べたのは第百十九号でのことでした。

それに先だって、例会で会長をお引き受けするというご挨拶をしてから一年が経ちました。いくつかのイベントもあった一年間でした。

令和五年初懐紙は、秀樹前会長追善の会でした。猫蓑会や秀樹さんに縁の方を来賓としてお迎えして、開催いたしました。ご出席いただきました草門会川野蓼艸様、湘南吟社小林静司様、日本連句協会高尾秀四郎様の三氏に改めて感謝を申し上げます。

夏には非公式の行事ではありますが、「真夏のなごや応援連句会」を催しました。この会は東京方面の連句人と名古屋方面の連句人との交流を図ろう、ということがきっかけとなって実現しました。猫蓑会員に限らず、駆けつけてくださった方もいらっしゃいました。日常的に巻いている連衆とは違ったメンバーとの実作は、刺激的でした。新しい出会い、懐かしい出会いの生み出す座の力を実感しました。今後も、いつでもどこででも応援し応援されて、連句の輪を広げていくことが可能だと確信することができました。

九月。猫蓑会の深川連句会が二百回を迎えました。深川連句会は、関口連句教室を前身としています。平成四年に関口芭蕉庵の改修を機会に、会場を江東区芭蕉記念館に移しました。明雅先生がご出席されなくなり、平成十五年四月に深川連句教室を深川連句会と名前を改称して現在に至ります。当日は第一回深川連句会の作品を紹介しました。

（次ページへ続く）

４月、亀戸天神社神楽殿での正式俳諧が復活

６月、アルカディア市ヶ谷で第 33 回同人会総会

●目次●

▽一年間――猫蓑会会長　鈴木千恵子　1
●第百六十五回猫蓑会例会
▽苧庵四世襲号にあたって――根津忠史　3
◎根津芦丈秋発句抄　3
◎芭蕉忌・明雅忌作品　源心六巻　4
◎芭蕉忌正式俳諧　5
●第十七回猫蓑会リモート作品　二十韻二巻　7
●国民文化祭いしかわ 2023 連句大会受賞作品
〈一般の部〉
石川県議会議長賞
半歌仙「転車台」　石川葵　捌　8
日本連句協会奨励賞
半歌仙「ひとときの」　鵜飼桜千子　捌　8
日本連句協会奨励賞
半歌仙「今曲がる」　鈴木了斎　捌　8
〈ジュニアの部〉
文部科学大臣賞
表合せ六句「人気者」　鈴木千恵子　捌　9
国民文化祭実行委員会会長賞
三つ物「朝顔を」　植田円水　捌　9
石川県知事賞
三つ物「いちごだけ」　佐々木有子　捌　9
石川県教育委員会教育長賞
三つ物「ママまって」　植田円水　捌　9
加賀市教育委員会教育長賞
三つ物「たまねぎの」　植田円水　捌　9
一般社団法人日本連句協会奨励賞
三つ物「花びら舞って」　佐々木有子　捌　9
一般社団法人日本連句協会奨励賞
三つ物「寝坊した」　佐々木有子　捌　9
一般社団法人日本連句協会奨励賞
三つ物「つくしんぼ」　山内裕子　捌　10
一般社団法人日本連句協会奨励賞
三つ物「しゃぼん玉」　山内裕子　捌　10
▽幸せな時間――佐々木有子　10
●連句の先達・誌上インタビューQ&A
その❹　坂本孝子さん　10
●事務局だより　12

歌仙「大工の昼」（表六句）　坂本孝子　捌

鶯や大工の昼の爪楊枝　孝子
馥郁と香の立てる草餅　てつを
芝萌ゆるＳＬ車輪野を駆けて　暁巳
時計持たないこの頃の人　かりん
テーマパークおとぎの城に月仰ぎ　千惠子
忘れ扇をまたぐ黒猫　ん

ちなみに、わたしの手元にある一番古い関口連句教室のプリントは、第九十六回のものです。

歌仙「引く鶴の」（表六句）　東　明雅　捌

引く鶴の影香久山をしばしかな　蓼艸
雪解雫の絶え間なき音　千町
春暖炉紅茶に一つパイそへて　清子
刺繍の糸を吾子に邪魔され　和久
新幹線硝子（ママ）の窓に月走る　まさし
行き交ふ人の顔のやや寒　明雅

歌仙「春の雨」（表六句）秋元正江　捌

潜り戸の軋む扉や春の雨　正江
独り座れば匂ふ沈丁　哲
利き茶する鉄瓶に湯の沸きたちて　千惠子
同窓会の打ち合はせする　文人
斉唱の童に返り月淡く　徒司
既に乾びぬ鵙の早贄　江

（その後、連句教室は第二百四十六回まで続きました）

芭蕉忌実作は、根津忠史氏の苧庵四世襲号記念として行い、座名は芦丈先生の五つの著作名と、発刊された連句雑誌の名前から採りました。「山襖」『砧のひびき』『露の秋草』『山一重』『麓の雰（きり）』『この一路』です。座名に採りましたが、わたしたちが手にしたことのないものも多く、伊勢流の伝統に学ぶということにもっと自覚的であらねばと反省させられました。

十月。全国的な連句大会の国民文化祭いしかわが開かれました。猫蓑会員は一般の部三巻、ジュニアの部九巻の入賞を果たすことができました。一方で一般の部の選者を務めて、残念に感じたこともあります。作品の選をするときには、もちろん捌きや連衆の名前は分かりません。が、後に作品を見直して、会員の作品の内容に魅力的なところはあるのに誤字・脱字、文法の誤りなどが目立つことが気になりました。もちろん連句は大会入賞のために巻くものではありません。けれども、芭蕉も「文台引き下ろせば即反故也」と言いながら、作品を繰り返し校合しています。募吟以前に他人に作品を見ていただくときに、清記に心を尽くすというある意味では当然の気配りを忘れないでほしいです。

振り返ってみるとやはりイベントの多い一年間でした。今後は必要に応じてイベントも開催しながら、基本は地道な例会、地道な各連句会の充実を図っていきたいと思っています。今回、深川連句会の活動に詳しく触れたのもそういった思いの一端からです。

今後のことにも触れてみます。ＡＣＣ（朝日カルチャーセンター）の連句入門講座は、猫蓑会の中に位置づけられているものではありませんが、昭和五十六年に明雅先生が開講されたものです。わたしはこの一月から、その実作指導を引き継ぐことになりました。歴史を振り返ってみると、開講時には、明雅先生が理論の講義と実作の指導をされていて、その実作指導を一時期は秋元正江さんが担当され、平成五年には理論を式田和子さんが担当されるようになりました。原田千町さんも一時期、理論と実作とを担当されていました。和子さんや正江さんが亡くなられて、理論を市野沢弘子さん、実作を佛渕健悟さんという時期が続きました。平成十七年に健悟さんが退任され、坂本孝子さんがご担当に。平成二十五年には弘子さんがご退任。平成二十八年からは鈴木了斎さんの理論と孝子さんの実作指導、と流れは脈々と続いてきました。当初は水曜午後だった講座も、平成四年には土曜午前になり、平成二十八年からは日曜午前の日程で行われています。連句普及の一助となるよう、日曜の朝から受講者の皆さまと、よりよい作品とは何かということを追求していこうと気持ちを新たにしています。

7月、江東区芭蕉記念館で第 164 回例会、猫蓑会総会

10 月、芭蕉記念館で第 165 回例会、芭蕉忌正式俳諧

第百六十五回猫蓑会例会
芭蕉忌・明雅忌

芋庵四世襲号にあたって――根津忠史

本来なら、芭蕉忌の正式俳諧興行の後には、明雅忌として東明雅先生の発句による脇起の実作会のはずでしたが、小生の芋庵四世襲号のお祝いとして、祖父、芋庵一世根津芦丈の発句を立句にした源心を皆様に巻いていただきましたこと、篤くお礼申し上げます。

二世、忠二（父）は芦丈の次男で、信州大学へ祖父が通う頃に勤めが岡谷に移ったため、お供するようになりますが、本格的に連句を始めたのは退職後となり、清水瓢左師のご教導を受けておりました。そして、芦丈十三回忌の記念誌を出すべく頑張っておりましたが、その夏に発病して、二ヶ月後の秋に亡くなってしまいました。

取材のため同行して下さった東先生による哀悼の句は

葉桜に撮りし写真が形見かな　　明雅

でした。

そのため、十三回忌法要は父の卒哭忌の法要ともなってしまいました（藤沢龍口寺）。

三世、芙紗は芦丈の孫、小生の従姉で、地元の電電公社に勤めた後には芋庵に祖父と同居し、祖父亡き後は伊那の地で連句普及発展に努めておりました。残念ながら雨の夜、芋庵の前の坂道で転倒、頭部を強打し、救急車で運ばれ入退院を繰り返していましたが、令和三年暮に亡くなりました。

四世忠史は、日本青年館の芦丈三十三回忌のお礼に東先生のお宅にお邪魔した際に「来月から深川に来なさい」と仲人命令で、工業大学機械科を出てゴム会社に定年まで勤めた身には全くのゼロスタートとなりました。けれども、本来の雑学好みが連句と相性がよかったのか、以来毎月が楽しみになり、皆様の温かいご指導ご鞭撻で現在に至り、若輩者ながら芋庵を継ぐことになりました。

その記念として庵築九十年と四世襲号のピンバッジを作り、皆様に差し上げました。

今後は祖父のアナログ連句をデジタル化して下さった明雅先生の式目美学を継承すべく、頑張っていく覚悟でおりますので、よろしくお願い申し上げます。

根津芦丈翁秋発句抄

根津忠二編「芦丈句抄」（清水瓢左著『連句集此の一年』所収）より、秋発句を抽出

二羽居れど一羽はちさし秋の蝶
秋風や痩せ田の畦の痩せ案山子
永き夜を何して更かす島の灯ぞ
脚気病む
めきめきと脛軽うなる秋の風
山霧に知らで過ぎけり不破の関
あはれさの眼にも離れず秋の月
秋の心また蕣に深めたり
秋の宿筑紫帰りの僧に逢ふ
土窯石窯古代の人の秋思ふ
散るけしき見せず紅葉の村明かし
残り少なの紅葉に霧の重み見る
散りしける銀杏冷々護謨草履
人の垢に染まぬ古刹の紅葉踏む
いく颱風堪え来し巨木神と見ぬ
寝心の秋に移れり蚊屋の波
明月や引残しおく戸一本
鵙の声秋の日の色引きしめる
秋暑し大空割間もなく碧し
雁来紅秋あつめ顔に雨に炎ゆ
秋はものゝ眼にしむ雲の白きさへ
肥揚車ホース生きをり秋暑き
田鯉とりて月見の料の鮓に裂く
藁塚に落着き見せて里の貌

第一六五回例会の源心六巻は、主として以上の発句から各捌が三秋、晩秋の句を選んで立句とし、脇起によって興行しました。

第百六十五回猫蓑会例会
芭蕉忌・明雅忌 源心六巻 1～5

山襖の座

脇起源心「蠅一匹」　根津忠史　捌

蠅一匹なんじ(ママ)も灯下親しいか　芦丈翁
名残の月はすでに中天　忠史
裏庭の木の実降る音かすかにて　有子
絵筆を洗ふクッキーの缶　桜千子
ウ 幸の宿若きら目指す山襖　季何
言葉を交はすごとの白息　ひろみ
偶然に触れた手と手がやがて恋　をんみ
噂になつてその気昂る　有
本当はおかめひよつとこ深い仲　史
ウクライナはやイスラエルはや　季
黒猫と有刺鉄線くぐり抜け　桜
雨宿りして二合半の酒　を
六体の地蔵の笠に花びらが　み
蚕仕上がり爺は満足　史
ナオ 日曜日風船売りの屋台来る　有
理科得意でも解けぬ知恵の輪　桜
病院のコロナワクチン低温に　季
鵠重く川面蹴り飛ぶ　み
寒い風防いでくれた大男　を
次に選ぶは金持ちにする　有
狙ふ的見事射抜いたキューピッド　史
百を切るにはサラダもりもり　季
熱帯夜月あかあかと寝は浅く　桜
水泳選手になつた正夢　を
ナウ この先はスイッチバック峠越え　み
反り橋の脇祖父の碑　史
信玄の威光を偲び花筵　有
王手と指して棋士の麗らか　桜

連衆　佐々木有子　鵜飼桜千子　堀田季何
江津ひろみ　福澤をんみ

砧のひびきの座

脇起源心「護謨草履」　田中秀夫　捌

散りしける銀杏冷々護謨草履　芦丈翁
名残の月に寄する叢雲　秀夫
秋蝶の窓より入ればそのままに　葵
同じところでピアノ止まりて　純子
ウ 景気よく御手を拝借酉の市　肇
柚子湯の中で柚子を傷つけ　俊子
教科書を捨てて単車の二人乗り　純
ボーイズラブはどしやぶりの中　葵
気に入りのキーホルダーを捨てきれず　俊
言はず語らず武士の情けは　肇
半眼で眠る三毛猫階に　葵
明神様に深く一礼　肇
白球を追ひて球児の花を待つ　葵
朝寝の夢は世界遺産へ　純
ナオ 難民と無事をよろこぶイースター　肇
酸いも辛いもエスニックなら　俊
手作りは昭和生まれのこだはりと　純
色の濃いのが粋な銘仙　肇
奥様と晴れて呼ばれて冬灯　俊
障子の陰に清姫の笑み　葵
エンターキー押せばすべてが無となつて　仝
イグノーベル賞連続で取り　肇
角打で味はふ酒に月涼し　純
閻魔参りにしのぶ親方　肇
ナウ 北欧のソファーにゆつたり身を休め　純
飴玉の箱隠す膝元　俊
花の友籠の鳥にも声掛けん　夫
風船売に子らの群がる　葵

連衆　石川　葵　近藤純子　宇田川肇
三木俊子

露の秋草の座

脇起源心「脛軽うなる」　大島洋子　捌

めきめきと脛軽うなる秋の風　芦丈翁
栗名月の照らす里山　洋子
新米の炊き上がる香の漂ひて　鑑
普段着まとふ人ばかりなり　了斎
ウ 駅出れば底冷えの道そそくさと　邦枝
山茶花散つて土に彩　あき子
初恋の転校生の標準語　洋
わざと居残る亀の当番　あ
千年の伽藍も須臾に崩れをり　斎
アクセル全開皆を尻目に　あ
戦争を日常とするこの世界　鑑
善行がまだ積もり足りない　邦
せせらぎに舞ふ花びらの果ては海　鑑
残れる雁に飛べと呼びかけ　斎

ナオ 点々と遍路の白の連なりて　仝
いつもの十八番唄ふ追分　あ
介護士に習ふ挨拶タガログ語　鑑
浴衣の君が妙になまめく　斎
乱れ籠よりも乱れた閨の内　仝
ねずみの巣だけ残る破れ家　鑑
満月が巨眼となりて睨みをり　邦
つい飲みすぎた密造の古酒　鑑
爽やかに壺屋の窯の三代目　洋
木の実時雨に潜む旋律　邦
ナウ ゆつたりと延命の湯に足伸ばし　あ
ゴールキックで勝利呼び込む　鑑
西行も芭蕉も負けた花の山　あ
四方うららかな国のまほろば　鑑

連衆　荒木　鑑　鈴木了斎　上田邦枝
岩崎あき子

山一重の座

脇起源心「痩せ案山子」　棚町未悠　捌

秋風や痩せ田の畦の痩せ案山子　芦丈翁
名残の月は森の真上に　未悠
大鍋の茸スープをかき混ぜて　千惠子
ママ友集ひ尽きぬおしやべり　正夫
ウ 炬燵には炭をくべると知らぬ児等　明子
熱燗二合想ひ告げる夜　祥三
次々と殺し文句のきりもなく　吉文
乱れ籠からのぞく帯揚　明
前足でちよつかいを出すうちの猫　千

パリの路地裏画家とダンサー　明
石畳靴音だけを響かせて　祥
透明人間服はいらない　千
誕生日祝ひとともに花便り　夫
岸辺に鳴らすオカリナの春　吉
ナオ 境内を一列に来る御忌の僧　明
平均台に妖精が舞ふ　千
自販機にカプセルトイがごろり出て　吉
冬銀河見て家路急ぎぬ　祥
日中をつなぎ昴を歌ひ上げ　千
姑娘と言ふ怪しげな店　明
ちよい悪のおやぢ恋には臆病で　千
災害の地へボランティア飛ぶ　吉
夏月に届け大谷ホームラン　明
ぺろつと食べる鰻特上　夫
ナウ 今どきの若者めざす鄙住まひ　吉
日々腹筋を五十回する　祥
花めぐり単線列車を乗り継いで　悠
白蝶を追ひ駆ける少年　夫

連衆　鈴木千惠子　國司正夫　野口明子
荻野祥三　永田吉文

麓の霧（きり）の座

脇起源心「土窯」　林　転石　捌

土窯石窯古代の人の秋思ふ　芦丈翁
牧童牧を閉ざす夕暮れ　転石
連子窓月の光のやはらかに　香織
しまひ忘れた赤い自転車　章子

ウ おかめ市面差しの似た者を連れ　遊眠
大奮発の越前の蟹　鄭和
背が伸びた孫の行く末楽しみに　霞
連れて来た娘は瞳サファイア　和
帽子から靴の先までペアルック　織
歌のすさびに最果ての町　章
地球から通信衛星あまた発つ　眠
かぐや隠れる姫の行宮　和
門跡の花はひとしほ清らかに　眠
背戸の小流れ風光るなか　霞
ナオ 手作りの絵凧をあげる父と子と　仝
千メートルからダイブする技　和
お財布に診察券が何枚も　織
無作法な医者赤ひげといふ　和
配られるお助け米はお上から　眠
シングルマザー余裕やうやく　章
里帰り親戚まはる夏の月　仝
羅の裾ちよいとはだけて　織
藤壺の面影ばかり追ひかける　仝
五十四帖すべて英訳　和
ナウ アーカイブ四季の夕陽を撮り置きて　霞
甘味処に長い行列　織
誰が植ゑけん衆生のための此の花を　石
車窓に望む朧なる峰　織

連衆　平林香織　武田章子　内田遊眠
髙山鄭和　髙塚　霞

令和五年十月十八日
於　江東区芭蕉記念館

第百六十五回猫蓑会例会
芭蕉忌・明雅忌 源心六巻 6

この一路の座

脇起源心「藁塚に」　武井雅子　捌

藁塚に落着き見せて里の貌　芦丈翁
　ふと目をやれば鵙の贄刺　雅子
有明にノートパソコンオフにして　英雄
　漂つてくる珈琲の香（かさ）　敦子
ウ 海峡を海豚の親子のんびりと　徹心
　懐手して窓に寄り添ひ　美智子
上野発最終列車と目配せし　アンズ
　瓦礫山なす復興の村　英
割れ硝子磨き磨きてペンダント　ア
　ローランサンの肌は桃色　智
宣伝部勝負をかける一行に　英
　宝くじ買ふけふの占ひ　敦
ルンルンと巡るお濠の花筏　心
　棚の蚕が騒ぎ出す頃　仝
ナオ 星朧惜しまれながら歌手逝きぬ　ア
　どこがいいのかひとりカラオケ　英
かつかつと螺旋階段靴の音　智
　この猫何故か足袋を履いてる　雅
黒板に並ぶ名前を囓されて　英
　ボトルキープの止まり木で待つ　敦
新店長起死回生の新メニュー　心
　月天心に心太突く　敦
貴やかな祇園会の笛まだやまず　英
　じやんけんぽんで右に左に　智
ナウ 頻繁に介護タクシー頼む友　敦
　古城の街は塀を巡らし　心
実朝の花を攫へる段かづら　智
　ＳＮＳにあげる初虹　敦

連衆　鈴木英雄　武井敦子　佐藤徹心
　聖成美智子　松島アンズ

令和五年芭蕉忌正式俳諧　俳諧連歌二十韻

木枯やたけにかくれてしづまりぬ　翁
　時をりに舞ふ綿虫の群　転石
少年の詩心ふつと湧くならん　良子
　シャープペンより２Ｂ鉛筆　雅子
ウ 雁の棹月下の湖を鳴きながら　孝子
　愛の誓詞をなぞる長き夜　遊眠
イエスとは応へたけれど湧く秋思　了斎
　リスク承知の急な転職　ひろみ
末の子が親の背中を見て育ち　吉文
　どこへも一緒仔犬ころころ　敏枝
ナオ 石畳平和の鐘が鳴り響く　忠史
　松の色冴え夏の霜踏む　淳子
ジョギングのタオルの揺れる隅田川　香織
　キッチンカーの彼にぞつこん　あき子
空港はお腹大きな人ばかり　季何
　募金の箱に小銭投げ入れ　肇
ナウ 遠き日の友の笑顔を思ひ出し　壽子
　霞も晴れて巡る盃　鑑
夢語る植物学者花の下　千惠子
　欠伸止まらぬうららかな午後　執筆

令和五年十月十八日
於　江東区芭蕉記念館

芭蕉忌正式俳諧
令和五年秋　配役

宗　匠　鈴木千惠子
脇宗匠　林　転石
副宗匠　武井　雅子
執　筆　佐藤　徹心
知　司　江津ひろみ
座　見　田中　秀夫
座　配　内田　遊眠
花　司　永田　吉文
香　元　平林　香織
配　硯　宇田川　肇
仝　荒木　鑑

所作指導　武井　雅子
奏　楽　鈴木　了斎
写真撮影　田中　秀夫

正式俳諧興行終了後、お役一同の記念撮影

正式俳諧興行の床の間にかけられた、芦丈翁肖像の画軸

正式俳諧興行次第

1・執筆（しゅひつ）登場

2・執筆の文台捌

3・連衆が付けのために執筆前へ進み出る

4・宗匠、脇宗匠、副宗匠が付句を吟味

5・宗匠は花の句を詠む前に芭蕉像に香を供える

6・執筆が役目を終え、仮座へ戻る

7・配硯が硯を回収し、知司が興行終了を宣言

●全過程を網羅してはいません

令和五年十月九日　首尾

第十七回猫蓑会リモート Zoom 17

1～2

手習の座

二十韻「こつんと弾む」　岩崎あき子　捌

団栗のこつんと弾む石畳　あき子
名残の月へさそふ駒下駄　徹心
馬肥ゆるダイエットなど気にせずに　洋子
漫画取り合ふ兄と弟　敦子
ウ　制服は短い丈が好みです　暁巳
電光のごと盗まれたキス　あ
ライバルに譲つてやつた玉の輿　心
ご先祖様は清水次郎長　洋
五輪塔冬の燕が旋回し　敦
カメラ構へる着ぶくれの記者　巳
ナオ　トレッキング山の魅力にとりつかれ　あ
荒れ地耕し植ゑる蕎麦種　心
移住して思ひがけない人と会ひ　洋
浴衣はだける湯上がりの肌　敦
夏の霜逃避行の影長く伸び　巳
三陸の海旨き弁当　あ
ナウ　酒蔵の売りは吟醸呑みくらべ　心
有線放送のどらかな声　洋
花吹雪過去と未来の真ん中に　敦
ビルの上にも蜜蜂の舞ふ　巳

連衆　佐藤徹心　大島洋子　武井敦子　島村暁巳

蜻蛉（かげろふ）の座

二十韻「丹波栗」　鈴木了斎　捌

丹波栗都の孫へ送りけり　白山
虫の音高き土間の片隅　良子
街々へ十三夜月照り映えて　了斎
行列の先確かめにゆく　円水
ウ　久々に見るハワイアンキルト展　志保子
煉瓦倉庫に人のあふるる　良
軌道跡日焼の子らの走り抜け　仝
氷いちごがスカートに落つ　水
みみたぼを茜の色に染める君　仝
路傍に咲いたやうな初恋　斎
ナオ　寒鰤の半身を返す嫁ぎ先※　山
熱燗三合晩酌にする　水
屋台には叩き手を待つ大太鼓　斎
鹿の子絞りの粋な鉢巻　志
月見舟遠来の客待ち兼ねて　良
翁に見せむ宮城野の萩　山
ナウ　秋蝶に亡き母来たと思うたが　斎
布の鞄に遊ぶ人形　志
鄙びたる校舎を囲む花大樹　水
ともがらの呼ぶ午後のうららか　志

連衆　由雄白山　本屋良子　植田円水　北龍志保子

※ナオ折立：北陸には、新婦の実家が結婚後の歳暮に嫁ぎ先へ寒鰤一尾を贈り、嫁ぎ先が返礼にその半身を新婦側へ贈り返す風習がある。

石川県議会議長賞

半歌仙「転車台」　石川　葵　捌

転車台残る原野や星冴ゆる　葵
　初氷踏む長靴の跡　ひろみ
泣き笑ひ椅子取りゲーム佳境にて　霞
　耳朶にかそけきカリヨンの鐘　葵
夜勤終へ上着羽織れば明けの月　み
　皿に餌置く小鳥来る頃　霞
雅なる名を持つ菊の香の清し　葵
　プリンセスには気品備はる　み
ウ
曇りなき思慕の視線のまぶしくて　霞
　閨の私はしなやかな猫　葵
玄奘の旅に妖魔が次々と　み
　撮影クルー汗にまみれる　霞
決勝戦サヨナラ勝ちに涙あり　葵
　島のご馳走並ぶ円卓　み
産土の敷石杖の母と踏み　霞
　朧月夜に語る来し方　葵
花を賞で酒を愛づるも夢ごこち　霞
　紙飛行機の離陸うららか　執筆

連衆　江津ひろみ　高塚　霞

令和四年十二月十日起首
令和五年一月十一日満尾　文音

日本連句協会奨励賞

半歌仙「ひとときの」　鵜飼桜千子　捌

ひとときの心あづけて花の下　さくら
　春の匂ひを包むスカーフ　章子
やどかりは殻揺らしつつ進むらむ　穹子
　回覧板に丸印つけ　みみこ
マラカスで盛り上げてゐる月の宴　茂夫
　ターミナル駅消えぬ秋の灯　明郎
黒葡萄押し合ひながら熟れ進み　美智子
　この不思議さはなんだらうなあ　一湖
ウ
逢ふたびに甘き言葉のシャワー浴び　菫絲
　元彼似です赤ちやんの指　桜千子
地球てふ星存亡の危機かとも　さくら
　月光を浴び捕鯨船ゆく　章子
擦り込むは尿素たつぷり胼薬　穹子
　釈迦も我にも家出経験　みみこ
甚平のかつぽれを踏む音高し　茂夫
　侵略の火を消す術は何　明郎
濃く淡く藤のむらさき波立ちて　一湖
　夢の切れ目を覗くてふてふ　菫絲

連衆　東海林さくら　内田章子　川崎穹子
　小田みみこ　林　茂夫　安楽明郎
　聖成美智子　朝倉一湖　越尾菫絲

令和四年四月七日首尾　於　北とぴあ

日本連句協会奨励賞

半歌仙「今曲がる」　鈴木了斎　捌

地下鉄のああ今曲がる春の闇　了斎
　弥生尽きゆくときの加速度　信夫
あたたかにチター奏者の首揺れて　アンズ
　ガス灯の列点すなりはひ　斎
赤心を立待月に捧げたる　夫
　小さな庭に秋の七草　ア
海峡を渡るつもりの鬼やんま　斎
　生徒会長奴を選ばう　夫
ウ
ママ友の服はお揃ひ参観日　ア
　女郎蜘蛛の巣雄がこそこそ　夫
逢ふ合図糸取歌に忍ばせて　斎
　にはとり憎む明易の月　ア
出たままの洗濯物へ降り始め　夫
　燗酒徳利冷めてしまつた　斎
禰宜の来て祝詞を上げる登り窯　ア
　犬の鎖を丘の辺に解く　夫
抜き抜かれ花走り去る石畳　斎
　一本道のすゑのかげろふ　ア

連衆　永井信夫　松島アンズ

令和五年四月十七日首尾
於　庚申文化会館

ジュニアの部受賞作品

文部科学大臣賞

表合せ六句「人気者」　鈴木千惠子　捌

グループ名「松尾芭隆」

ストーブや期間限定人気者　相坂紬生
　来てくれるかなサンタクロース　石川侑空
TWICE の日本公演楽しみに　大森真帆
　恋する乙女の心揺さぶる　高橋隆聖
二人きり秘密のデート花が舞う　小柴勇登
　蝶飛び回る鮮やかな森　執筆

令和四年十二月九日首尾　リモート

国民文化祭実行委員会会長賞

三つ物「朝顔を」　植田円水　捌

朝顔をまいてぐんぐんこえる空　植田結衣
「ミツバチ待って」走る弟　山内咲良
給食のメロンパンの日休めない　山内颯真

令和五年三月三十日首尾　リモート

石川県知事賞

三つ物「いちごだけ」　佐々木有子　捌

いちごだけ食べてごはんはいりません　植田泰就
　夏の日陰でないしょ話を　植田結衣
ねえちゃんとベッドの中でけんかして　泰就

令和五年五月三日首尾　リモート

石川県教育委員会教育長賞

三つ物「ママまって」　植田円水　捌

ママ待ってママちょと待ってママ待って　植田泰就
　じゃんけんグリコ長いかいだん　植田結衣
きらきらとびわ湖見下ろす花の城　山内咲良

令和五年四月四日首尾　リモート

加賀市教育委員会教育長賞

三つ物「たまねぎの」　植田円水　捌

たまねぎのシャツぬいでシャツぬいでシャツ　植田泰就
　父の日のカレー辛めにしよっか　植田結衣
かけっこでいちばんはやいぞあせかいた　泰就

令和五年四月二十九日首尾　於　自宅の台所

一般社団法人日本連句協会奨励賞

三つ物「花びら舞って」　佐々木有子　捌

風が吹き花びら舞って落ちていく　植田結衣
　ドラえもんかく春の夕方　植田泰就
恐竜をぼくらの町に呼びだして　結衣

令和五年五月三日首尾　リモート

一般社団法人日本連句協会奨励賞

三つ物「寝坊した」　佐々木有子　捌

春のゆめゆめのなかでも寝坊した　植田泰就
　ゴールデンウイークバーベキューする　植田結衣
百回もトランポリンで飛びはねて　結衣

令和五年五月三日首尾　リモート

（国民文化祭受賞作品、次ページへ続く）

第三十八回国民文化祭いしかわ百万石文化祭2023　連句部門受賞作品十二巻 11～12

一般社団法人日本連句協会奨励賞

三つ物「つくしんぼ」　山内裕子　捌

つくしんぼのっぽはだれか競い合い　山内咲良
　トノサマガエル虫をぱっくん　植田泰就
帰り道「君をのせて」の大合唱　植田結衣

令和五年三月三十日首尾　リモート

一般社団法人日本連句協会奨励賞

三つ物「シャボン玉」　山内裕子　捌

シャボン玉ふわふわふわとどこいった　山内颯真
　ピンクにそまる花のじゅうたん　山内咲良
たべたいなアイスみたいなはるの月　植田泰就

令和五年四月四日首尾　リモート

幸せな時間――佐々木有子

昨年、鈴木千惠子さんにジュニア連句へのお誘いを頂いた。ジュニア連句の経験がなかったので多少の不安はあったが、やってみたい気持ちが優った。何より子供達に元気をもらえるのではと期待が膨らんでいたのだ。

十二月に静岡県裾野市の中学生たちとリモートでの表六句。リモートでのやり方を所々教えて貰いながらのリラックスした句座。彼らの発想のゆたかさに驚きつつの幸せな座だった。

今年の五月には、植田家の円水さんとお子達二人とのリモートの機会があった。小学四年生の結衣ちゃんと一年生の泰就君の可愛いこと。子供ならではの素直な言葉が次々出てきたのには、母親の円水さんの雰囲気作りが大だったと思う。植田家の三人との作品受賞の報に、感謝の気持ちと共に楽しい時間を思い出した。

国民文化祭では、その植田家の三人と一緒の座になった。元気いっぱいのお子達にはらはらした向きもあるかもしれないが、年齢を考えれば、すごくお利口だったと思う。実作会の際も次々に言葉が出てきて、時間よりずっと早く満尾に至った。途中からは、お父さんの峰悠氏も加わり、この上なく楽しく忘れ難い時間になった。植田家の皆さん、本当におめでとうございます。

連句の先達・誌上インタビュー　Q&A

その❹　坂本孝子さん

Q1●連句歴はどのくらいになりますか。

A　およそ四十年くらいかと思います。

Q2●連句を始めたきっかけは何ですか。

A　昭和四十八年新宿朝日カルチャーセンター（ACC）開講。「芭蕉の美学」講師・加藤楸邨（高校時代の国語の先生だった）に入門。ある時、芭蕉七部集「狂句こがらしの」の巻の評釈を聴き、連句の虜に。句友・秋元正江さんと手探りの連句を始める。機を同じうして、昭和五十六年、ACC「連句入門」（講師・東明雅）開講、即入門。明雅先生中心の句座が立ち、盛況。

Q3●初めての実作の場はどこでしたか。どのような様子でしたか。

A　常に落ちこぼれだった私は、三十六句の中、明雅先生の一直でやっと一句、「の」

の字だけが付く有様。惨めで、何度やめようと思ったことか。

それでも門下生が増え、文京区新江戸川公園の松聲閣で明雅先生主宰の結社「猫蓑会」が発足。あちこちに自主連句会が生まれ、いつも気後れしていた私も、緑華亭では月一回の手料理と浅酌と連句を楽しむ会をもち、毎年桜の頃には、調布の神代植物公園でお花見連句会を開くようになりました（二十七回）。

Q4●明雅先生との思い出を教えてください。

A ある時、私は先生に無礼なことを申してお叱りを受け、欝になってしまいました。その時、先生が「文音をしてやろう」と救いの手をさしのべてくださいました。怖くて優しい先生でした。

俤や白磁に満たす新走り　孝子

一昨年、四宮会での米寿祝賀興行で頂いた花束と

Q5●連句をやっていて、よかったことは何ですか。

A
・古今東西に視野空間が広がること
・地位・性別・年齢を越えた知的交遊関係ができること
・呆けそうで呆けずに生きられること

Q6●印象に残っている付け（または、発句、一巻など）を教えてください。

A Q5にある文音　歌仙「春愁」。

春愁の回転扉押しにけり　孝子
　穀雨曇りの淡き物影　明雅
石蕚掻き海猫ふり仰ぐこともなし　孝
　……
白日に覚めて現も花ふぶき　雅
　手をさしのばし包む陽炎　孝

あの頃、ACCの会場・住友ビルのエントランスは回転扉でした。

後にこの歌仙は、解説付きで『連句辞典』に所収。実に光栄なことでありました。

そのほか思い出に残る付句としては、

生涯の憶へば眩しひと処　孝子

これはいま入院中で手元に資料がなく、作品の題も前後の句も覚えていません。

Q7 連句の後輩にアドバイスがあれば、お願いします。

A
・上手な人の胸を借りて文音をする
・即吟力を鍛える（一句に五句ぐらい考える）
・言葉や表現の選び方を工夫する
・発想のセンスを磨く

●付記●　緑華亭（坂本）孝子

ACCの連句入門講座は、明雅先生がご高齢を理由に後見に回られて以来、講師は秋元正江・式田和子・原田千町・市野沢弘子・佛渕健悟、と続き、明雅先生が後見も降りられた後、健悟氏が個人的事情で退任。急遽、坂本が引継ぎ、現在、鈴木了斎（理論編）、坂本（実作編）に至るが、本年（令和五年）九月、文字通り老骨がポッキリと折れ、入院加療の為、辞を表し、鈴木千恵子氏に実作編の後任をお願いする事となった。現在は無事退院し、鋭意リハビリ中。いずれどこかの俳席で遊んでやって下さい。

実に長き年月に亘り、恩師、句友、多くの連衆に賜った御恩に感謝するばかりです。有難うございました。

事務局だより

●既往の行事

・十月十八日（水）に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十五回例会（芭蕉忌・明雅忌）を開催。芭蕉忌正式俳諧興行の後、根津芦丈師の発句による脇起源心を苧庵四世襲号記念として興行。当日作品は、今号4～6ページに掲載。

●今後の行事予定

・一月二十八日（日）に、アルカディア市ヶ谷にて、第百六十六回例会（令和六年初懐紙）を開催予定。歌仙を興行。

・四月下旬に、亀戸天神社にて、第百六十七回例会（藤祭例会）を開催予定。神楽殿にて正式俳諧興行（一般公開）の後、二十韻を興行。

・六月二十三日（日曜日）に、アルカディア市ヶ谷にて、第三十四回猫蓑同人会総会を開催予定。議事の後、歌仙を興行。

●猫蓑会リモート（ZOOM）連句会

・第十七回を十月九日（月曜・祝日）に開催。当日作品は、今号7ページに掲載。

・第十八回を十二月九日（土曜日）に開催。当日作品は次号に掲載予定。

・第十九回を二月二十三日（金曜・祝日）に開催予定。

●リモート連句講習会を開催します

・ご希望があれば奇数月第一土曜日に、「猫蓑会リモート室」にてリモート連句講習会を開催します。筆記係やホストを務めるために必要な事柄も。ご希望の方は、平林香織《khira884@gmail.com》宛にメールでお申し込み下さい。

●猫蓑会リモート室をご利用ください

・会員は、「猫蓑会リモート室」を無料で、時間制限なしに使用できます。会員が借りれば会員外の方も含めて利用できます。お仲間との交流や打合せにもお使いください。希望日時に他の使用予定があるかどうかの問い合わせなども含め、これも平林香織宛にメールでお申し込みください。

●猫蓑作品集二十六（七月刊）

・まだ僅かながら残部があります。一部二千円（送料含）。ご希望の方は平林香織宛にメールでお申し込みください。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・匿名　　令和五年十一月　一万円

・基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
　　猫蓑基金　普通預金　3376045

●新会員

・秋山陽一郎　（東京都）令和五年十二月入会

・鷺山京子　（東京都）令和五年十二月入会

・花島のぼる　（東京都）令和五年十二月入会

●新宿朝日カルチャーセンター連句入門講座

・今号の巻頭記事と前ページの記事にもある通り、新宿朝日カルチャーセンター連句入門講座で実作編の指導を担当しておられた坂本孝子さんが昨年末までで退任され、一月から猫蓑会会長、鈴木千惠子が引き継ぎました（理論編は従来通り鈴木了斎が担当）。時間に余裕のある方は、ぜひ受講されるようお勧めします。既に受講経験のある方にとっても新鮮な学びがあるはずです。基本的に毎月第一日曜日と、第三日曜日の午前十時から十二時までです。詳しくは、朝日カルチャーセンターの公式サイトでご確認下さい。

●『猫蓑通信』の刷新について

・日ごろより本誌をご愛読いただき誠にありがとうございます。平成二(1990)年十月に創刊して以来、原則として年に四回刊行し、百二十三号（すべての号を当会ホームページで閲覧可能）となりました。本誌は会員のほかに、広く内外の方にも送付して参りました。

　印刷費をはじめ諸経費の高騰が従来通りのかたちでの本誌刊行に少なからぬ影響を及ぼしています。理事会で、刊行回数、誌面内容、送付先等について見直しを行っていくことになりました。次号は発行が遅れるかもしれません。より良い本誌の在り方について各位のご意見をお寄せいただければ幸いです。

季刊　『猫蓑通信』第百二十三号
　　令和六年一月十五日発行
発行人　猫蓑会　鈴木千惠子
事務局　佐々木有子
　　〒161・0033
　　東京都新宿区下落合4・9・34・313
編集人　鈴木了斎
編集委員　奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千惠子・武井雅子・平林香織・御園魚彦
　　（五十音順）
印刷所　印刷クリエート株式会社